

何を自己利益と考える時か 環境保全、社会的選択と個人の行動への考察

外国語学部ドイツ語学科 3 年
A0052027 斎藤愛

1972 年のリオサミットから、持続可能な開発がかかげられるようになる。何故、“持続可能な”なのだろうか。私的な理解はこうである。人間は、足元にある地球の資源を開発し、財を得て生活をしているが、その生活のために、地球環境（住環境）という足場を欠いてしまったら財が手元に残ろうとも人間は生活をしていけない。また、この市場システムでの生活に慣れている人々が、物資よりも、環境面だけを考慮する生活に極端に切り替えることは無理であろう。ただ開発、生活をして目前の財を求めて動いてきた結果、環境という足場を失う傾向にあると気づいた人間は、この両方の財のバランスをとらなくては上手く生活していけないだろうと考える。そこで使われるようになったのが、“持続可能な”という言葉ではなかろうか。今まで、手元の財を求めて開発し、市場メカニズムを築いて、それに慣れて生活してきた人々が、環境問題を直面し、それとバランスをとって生活をしていかななくてはならなくなっている中、人々はどの行動するのだろうか。私たちは、今後どうしてゆけばいいのだろうか。日本環境保全農業を通して、消費者と生産者の立場で分けて考え、後社会的選択と個人の行動について述べているアマルティア・セン氏の論を考察したいと考える。

関心ごとに敏感に反応する倫理を発展させることの重要性、そもそもの人間の他人へ社会性を踏まえた行動があることなどは、共感する。しかし、この懐疑論においてセン氏の反論は余り説得性を感じられなかった。市場メカニズムのドメイン以外で、経済不平等への問題や環境保護に対する違った試みが必要となってきたら、そういったものに関わってくるものの役割を調べていかななくてはならないと考える。法規制は益々ながら、資本主義の市場メカニズムの中で、こういったドメイン外の問題は、以前ではなかった価値観を新たに生み出していく必要があると思う。そういったところから、公共財も自己利益のうちに考えられる人々が増えれば、開発と環境の間で持続可能な生活が出来、環境保全も次世代に残せていけるかもしれない。食生活上ただ安全性を求めるというだけでなく、環境保全への価値を見出す人が増えて環境保全型農業への需要が高まれば、必然的に単価は下がり、消費者は益々買うようになり、生産者も増えていくのではないだろうか。今までの市場経済で付随的だった価値が、自己利益とされているものにより大きな割合で再認識されれば、開発だけに偏らないより良い社会的選択が出来、より良社会を作っていくことができるのではなかろうか。

参考文献

アンデリュウ・K.ドラゴン、クレム・テイヌデル『持続可能な農業と開発』UK、1999年。

『食生活データ総合統計年報 2001』食品流通情報センター。

吉田 良平「環境と農業 OECDレポート」1993年。

アマルティア・セン『自由と経済開発』日本経済新聞社、2000年。